

# マレーシア クアラルンプール日本人学校での実践

札幌市立共栄小学校 教諭 関本 勝幸 E-mail : [katsuyuki.hgl@gmail.com](mailto:katsuyuki.hgl@gmail.com)

## 1 はじめに

ありがとう、マレーシア。

ありがとう、クアラルンプール日本人学校。

3年間という派遣期間を終え、帰国して約半年がたった今、心からそう思います。

教師として、日本人として、親として、いろいろな立場・視点で見ても、本当に貴重な経験をすることができた日々でした。

今回、在外教育施設派遣教員帰国報告会という機会をいただきました。短い時間の中ではありませんが、私の3年間の派遣期間の中で印象に残っていることや、取り組んだ教育活動などについて自分自身ふりかえりながら、お話しさせていただきたいと思います。

## 2 マレーシアについて

### 2-1 国の概況

まず、マレーシアという国について簡単に紹介させていただきます。

【日本貿易振興機構(jetro)ウェブサイトより】

次に在外教育施設という視点で見ましょ

国・地域名	マレーシア Malaysia
面積	329,735平方キロメートル(日本の0.87倍)
人口	2,855万人(2011年、出所:マレーシア統計局)
首都	クアラルンプール 人口165万5,000人(2010年上半期)
言語	マレー語、英語、中国語、タミール語
宗教	イスラム教、仏教、ヒンドゥー教、キリスト教など
公用語	マレー語

う。世界中で50か国、80校強ある在外教育施設、日本人学校ですが、マレーシアには4つの日本人学校があります。まず私がお世話になったクアラルンプール日本人学校、そしてシンガポール国境近くにあるジョホール日本人学校、北部のタイ国境そば、世界遺産にも指定されているジョージタウンの近くにあるペナン日本人学校、そして南シナ海を渡って東、ボルネオ島(インドネシアではカリマンタン島と呼んでいます)のコタキナバル日本人学校の4つです。私が派遣された平成22年度はすべての学校に北海道から教員が派遣された珍しい年でした。旅行の際にコタキナバルの先生を訪ねたり、ペナンの先生から電話が来て、和太鼓の修理について尋ねられたり、ジョホールの先生が日本人会バレーボールの親善試合で学校を訪れたり、いろいろな行き来がありました。

マレーシアは近年、日本人に向けてMM2H(マレーシア・マイ・セカンド・ホーム)プログラムを推進しており、主に退職後のご夫婦などのロングステイを受け入れています。

日本人のMM2Hビザ  
(ロングステイビザ)  
取得者

2010年→195人

2011年→423人

2012年→558人

日本に比べれば治安が良くないことは言うまでもない東南アジアですが、マレーシアは中でも比較的治安が良く、人々も親日的で、物価も安く暮らしやすいことが背景にあるようです。

### 2-2 東方政策

この国の人々が概して親日的であることの背景には、1981年、当時の首相モハマド・マハティールが「東方政策」(Look East Policy)を提

唱し、押し進めたことが大きく影響しています。先進国に追いつくためには、欧米諸国ではなく日本(または韓国)の人づくり・国づくりに学ぶべきであるという理念のもと、彼が首相を務めた22年間、12000



マレーシアの経済発展の象徴とも言われるペトロナス・ツインタワー。日本のハザマ建設と韓国のサムスン物産建設が担当し、1998年に完成しました。

### 3 クアラルンプール日本人学校の子どもたち

クアラルンプール日本人学校は幼稚部、小学部、中学部と合わせて約800人弱、在外教育施設の中では大規模校と言えます。

子どもたちの多くはいわゆる日本企業の海外駐在員のお子さんということになります。母親か父親、どちらかがマレーシア人という子もクラスに2割ほどおりました。

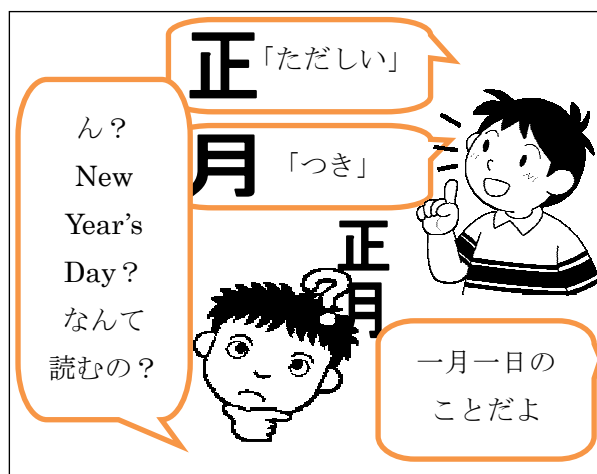
#### 3-1 海外で暮らす子どもたちの姿から

在外教育施設で教育活動を行っていく中で出会った子どもたちの中に、地元のインターナショナルスクールからの編入生もいましたが、この子

たちが最初にぶつかる壁は「自己管理」という壁です。自分の学習道具を自分で準備する、自分がよごしたところは自分で掃除する、このようなことができない子が多く本当に驚きましたが、同時に日本の世界に誇れる教育活動は整理整頓などの生活指導と、清掃指導であることを痛感しました。

また、インターナショナルスクールからの編入生や、新一年生でローカルの幼稚園などを卒園して入学してきた子の中には、英語は流暢けれども日本語の読み書きがほとんどできないという子が何人もおり、教職員の中でも看過できない問題になってきました。そこで、そういう子どもたちを対象に平成24年度から「日本語支援教室」を開講することにしました。

両親は日本人で、日常会話は問題なくできる子でも、学力テストなどを行うと、やはり週8時間以上学校で国語を学習してきた子とは大きく差が開いていることに、本人も、保護者も、そして担任も愕然とします。加えて、片方の親、特に母親が日本人でない場合は家庭で話されている言語が日本語でないケースも多く、そういう子にとって日本語教室は価値のある取り組みになったと言えます。毎週木曜日の放課後、5時間授業で子どもたちを帰した1・2年生の先生が中心になり、該当する児童を教室に呼び少人数で日本語の基礎を教えています。とはいえ、指導する教員も日本語を教えることに関して専門的な知識を持っているわけではありませんから、市販の一年生の漢字練習ノートやひらがな練習ドリルなど



を保護者に実費で買ってもらい、一緒に書きながら指導していくという形が多かったです。

前頁の例にもあるように、日本語を習得するということを考えた時、やはり日本の国語教育は極めて意味のある大切なものなのだとということを実感しました。第一言語のことを英語では **mother tongue** と言いますが、「お母さんの話す言葉」という意味で「母国語」なんだなとも感じました。

### 3-2 子どもたちを取り巻く環境

子どもたちの多くはコンドミニアムと呼ばれる家具付きの賃貸マンションに暮らしています。保護者の多くは現地の日本企業の駐在員ということもあり、マンション自体は非常に立派で、高級感があり、部屋の中も広々としていることも多いのですが、ひとたびコンドミニアムの敷地の外に出ると、スリやひったくりは日常茶飯事、連れ去り、誘拐などのニュースをよく目にします。

ここは東南アジアなのです。

クアラルンプールはそんな中でも比較的治安は良いと言われていますが、常に万が一を考えるのが親心というものです。親の目の届かないところに安直に子どもを出すことはできません。子どもを親なしで遊ばせるのであれば、最低でもコンドミニアムの敷地内、もしくは小さい子であればショッピングモール内にある有料のキッズパークです。コンドの敷地内は24時間警備をしているガードがいますし、入り口にはガードハウスがあり、身分証明書の提示が求められるなど警備がしっかりしていますので、親としてもまだ安心です。(それでもコンドミニアム内で泥棒に入られる家があります。) そんな中ですから、日本のように学校の帰りに「じゃ、3時に〇〇公園に自転車で集合ね！」などというわけにはいきません。

そのような背景もあって、子どもたちに友達同士で遊ぶ自由な時間を保障してあげたいという思いから、クアラルンプール日本人学校では「放課後」の時間を設けています。授業自体は6時間

でも15時過ぎには終わりますが、スクールバスの出発時間を16:30に設定しています。帰りの会が終わると、子どもたちはグラウンドや体育館、中庭やパソコン室、図書室など思い思いに友達との時間を楽しんでいます。それでも運動する機会自体が少なく、スポーツテストの結果などを見ると基礎体力がないことにショックを受けることも少なくありません。平成23年度から「体育朝会」を設定し、BGMに合わせて全校でグラウンドを走ったり、全校で縄跳びに取り組んだりして体力向上を図る取り組みもしました。(ちなみに、コンドミニアムにはたいていプールがついており、そこにコーチを呼んで水泳のレッスンをする子が多く、泳力だけははずば抜けて高いという分析もあります)

### 4 クアラルンプール日本人学校の保護者

ここでは、保護者を取り巻く環境と、その中でどのようなかわりをもちながら学習・生活指導を進めていったのかについて述べていこうと思います。

以下はある母親が個人面談中に話してくれたことです。

- 父親は駐在員としてタイやシンガポール、その他の支社などへの出張も多く、帰宅も比較的遅いことが多い。
- 加えて、休日には付き合い(自分が好きで?)ゴルフや会合にも頻繁に行く。
- 日本に比べて、母親と子どもだけで過ごす時間がものすごく多い。
- 母親が英語が苦手だと、外に出るのもおっくうになるので、さらに家に閉じこもりがちになる。

このような現状から、母親が子どもと一緒に過ごす時間が多く、母子の関係も煮詰まっていき、言うことを聞かせたり、心を通わせて叱ったりすることが難しくなっていく。母親個人としても、気軽にいろいろなことを話せる実家の親、学生時

代の友達などが近くにいるわけではなく、いるのは子どもの同級生の母親であることが多く、会えば話題は学校のことが中心になるので、結局気疲れしてしまう。同じコンドミニアム内でも保護者同士の付き合いがあり、いろいろな人がいる中で気疲れしてしまうという状況があります。

ここから見えてくることは、保護者、特に母親が置かれている環境の特殊性です。まとめると、

- ・海外の日本人コミュニティの中で様々な人と交流をもつことが要求されるという閉塞的な環境
- ・自分の子どもとの関係が日本以上に密になり、母子お互いに「逃げ場」のない閉塞的な環境
- ・学校、つまり育児のことを忘れて、気の置けない友人や家族とリラックスする個別の時間をもつことができない閉塞的な環境

いろいろな意味で「閉塞的な環境」の中で生活しているのが、クアラルンプール日本人学校に子どもを通わせている保護者の現実の姿です。そんな中でも子どもの家庭学習を見てアドバイスしてやり、慣れない環境の中で毎日5時台には起床して子どものために弁当を作り、具合が悪くなったと連絡があればすぐにタクシーで一時間近くかけて学校へ駆けつける保護者の方々には、本当に頭が下がる思いでした。先述のように、保護者の方の中には気難しく、お話をしてもなかなか分かり合えない方も中にはいますが、大部分は常識・良識あるきわめて協力的な方々です。

今でも忘れられないのは、派遣されて2年目、5年生を担当していた時のこと。3学期学校に足しげく通い、私に気付かれぬように、放課後PTAの会議室に子どもたちを集め、私へのメッセージをビデオ撮影し、編集してDVDにまとめ、学級お別れ会で私にプレゼントしてくれたお母さん方がいたことです。転出していった子にも連絡を取り、ビデオはないけれどメッセージカードを添えてくれていました。こういう方々に出会って、そしてこういう方々のお子さんを担任できて

本当に幸せだったと感じています。また、3年目で印象に残っているのは、父親が仕事の関係でほぼ家におらず、母一人子一人で奮闘する中華系マレーシア人のお母さんでした。日本語は全く読み書きができないため、教務とも相談し、連絡帳や携帯電話のSMSで学校からの連絡事項をやり取りするなど、学校でもできる限りの支援をしながら、何とか一年間を過ごしました。最後に「先生と出会えてよかった。あまり感情を出さない自分の息子が『関本先生が帰国するのがさみしい』と話してくれたのが親として本当にうれしかった」と伝えてくれたこと、一生忘れないだろうと思います。

## 6 3年間の実践をふりかえって

### 6-1 東日本大震災のこと

この三年間の中で一番大きい出来事、それは言うまでもなく、2011年の3月11日におこった東日本大震災です。日本から離れたマレーシアでも、大きな衝撃を受けました。テレビから流れてくる映像が、なんだか映画のワンシーンのようで、呆然とテレビの画面を見つめながら立ち尽くしたことを今でも覚えています。

あの日はちょうど派遣されてから一年がたとうとしていた年度末、中学部の卒業式を終え遅い昼食を二階の職員室でとっていた時のことでした。一階の事務室に用事で行った同僚が職員室に飛び込んできて「大変だ。東北のほうで大地震が起こって、津波が押し寄せて大変なことになっている」と言うのです。事務室に駆け込んだあとは、ただテレビから流れてくる映像を見ていることしかできませんでした。「日本を離れていてよかった」などと言う人は一人もいませんでした。日本中から教員が派遣されてくるのが在外教育施設です。同じ年度に派遣された先生の中には、仙台で生まれ育った先生や、福島県から派遣されてきた先生もいたのです。幸い福島出身の先生のご自宅は内陸部で、被害は少なかったようですが、

他人事とは思いませんでした。

23年度に入ると東北から「避難」してきた家庭もあり、お子さんも心に大変なショックを受けているので教室では震災や原発の話は控えること、という引継ぎもありました。遠く離れたマレーシアでも、震災が与えた影響は甚大だったことは間違いありません。子どもたちの中にも、祖父母を含め親戚が東北の太平洋側に住んでいるという子が少なからずいました。

震災が起きてすぐのころは、街を歩いていても見知らぬマレーシア人に声をかけられるということが何度かありました。例えば、「今夜6時から家族みんなで日本で地震や津波の被害に遭われた人たちに祈りを捧げます。日本の皆さんに神様のご加護がありますように。」などと話してくれる方、私が北海道出身だと話すと「それでもご家族が心配でしょうね」と気遣ってくれる方もいて、マレーシア人が親日的で思いやりの心をもつ人々だと改めて感じたことを思い出します。

このような未曾有の災害や事故に直面しながらも、そこから立ち直ろうとする人々の姿にも触れさせたいと思い、社会科の水産業の学習の中で震災のことも取り上げようと決めました。取り上げたのは三陸水産という水産加工業者です。漁獲量の減少、従事者の高齢化、燃料代の高騰などを背景に衰退の一途をたどる日本の水産業の現状に加え、今回の震災。ややもすると希望など一つももてずに学習が終わってしまうのではないかと思ってしまう。

子どもたちには何も知らせずに三陸水産のわかめの加工について取り上げ、「水産加工業に自信や誇りをもって取り組んでいる人たちがいるんだね!」とまとめると、子どもたちの中から「先生、ところで『三陸』って…」という声が上がりました。子どもたちは三陸水産が福島県いわき市の会社であることを突き止め、大きなショックを受けていました。「今はどうなっているんだろう…」単元の後半は三陸水産からお客さんにあてた新聞記事のメッセージを読み取りました。壊滅的な被害を受けつつも、何とか工場を再開したこと

がわかり、子どもたちは一安心した様子でした。最後は三陸水産の社員の方から子どもたちへメッセージをいただき、そして私が取り寄せたわかめを実際に試食したことで、「がんばろう、東日本」の思いを深めることができたと思います。わかめは海外に郵送してもらうのは難しいとのことで、先生の中に友人がマレーシアに遊びに来るという方がいると聞いて、無理やり頼んで持ち込んでもらったことも思い出します。学習が終わった後も、子どもたちの中には「親戚に頼んで三陸水産のわかめを注文し、航空便で送ってもらった」という子が何人かいて、驚きました。

社会科だけでなく、国語の中でも「ぼく、わたしの311」というタイトルで作文を書き、読みあうという取り組みも行いました。(社会科と国語での取り組みに関しては、添付資料をご覧ください)

他にも、一年目、2年生の子どもたちと取り組んだ生活科「ごまをそだててみよう」や、3年目に4年生の子どもたちと取り組んだ総合的な学習「おなかいっぱい マレーシア」など、在外教育施設だからこそできる実践を模索し続けた3年間でした。こちらも当時の学級だよりを添付しますので、ご参照ください。

## 6-2 平野先生の教育相談活動

クアラルンプール日本人学校に派遣が決まり、赴任した後もいろいろな方と連絡を取っていましたが、その中に学生時代にお世話になった北海道教育大学の平野直己先生がいました。平野先生とは岩見沢校の学部生時代、教育心理学関係の講義をいくつも受講させていただき、心理学に関係する本などもよく貸していただいていた（研究室は心理ではありませんでしたが）。それがご縁で先生が岩見沢で開いたフリースクールの立ち上げにもお手伝いをさせてもらったり、院生時代の2年間は先生の紹介で栗沢町の中学校で心の教室相談員のお仕事をさせてもらったりと、様々なところでつながらさせていただいていまし

た。

「クアラルンプール日本人学校へ赴任しました。マレーシアはいいところですが、ぜひ遊びに来てください」とメールをしたところ、「遊びに行くだけではなくて、せっかくだからそっちで何かできることはないかと思っているんだけど…」とお返事をいただきました。先述のように在外教育施設は子どもたちも保護者もそして働く教職員も、日本国内とはまた異なる様々な問題や悩みを抱えています。平野先生が来てくれれば、もしかしたらそんな現状にきっと何か解決策を投げかけられるかもしれない、

と思いました。管理職の先生方にも相談すると快諾してくださり、3年間、毎年平野先生に学校に来ていただき、教育相談と題して保護者との相談活動や、子どもたちとの面談、PTA への講演会、教員の研修会なども開くことができました。また、平野先生だけではなく、札幌市の児童相談所で勤務されている長屋先生や、お

茶の水女子大の青木先生など、普段なかなかお話を聞くことができないような先生方も一緒に来てくださり、子どもの指導や保護者の対応などで思い悩んでいる学級担任へもフィードバックをいただくことができました。私が帰国した平成 25 年度以降も、相談活動は続けていくと聞いています。私も今後は 3 年間働いた旧職員としてですが、「在外教育施設への日本国内からの支援活動」と

いう平野先生の研究テーマに、何らかの形でお手伝いできればと考えています。



学校内を回る平野先生。幼稚部の子どもたちに声をかけてくださっているところ。



### 6-3 若手学習会

派遣されて 1 年目、子どもの指導や行事の準備に追われ、ものすごいめまぐるしさの中で日々が過ぎていきました。

そして最初の年、平成 22 年度が後半に差し掛かってきた 2 月、私にとってショックだった出来事がありました。それは、一緒に来馬した財団派遣の若い先生が帰国することを決めたことでした。教員免許は持っていたものの、現場で指導した経験はほとんどなく、もちろん学級担任は初めてということで、学習指導や子どもへの対応、保護者とのかかわりなどでいろいろと苦労しているのは知っていました。しかし、そこまで思い詰めて悩んでいたとは知りませんでした。

職員室でもすぐそばの席だったのに、どうして気づいてあげられなかったのだろう。どうして自分は何も声をかけなかったのだろう。私はしばらく考えていました。言い訳がましいですが、一年目、自分自身も必死で、自分のことだけで精いっぱいだったのです。

まじめで気遣いのできる先生であればあるほど、周りの忙しく動いている他の先生方には相談できなくなってしまうのではないかと。外部に学びに行ったり、客観的に話を聞いたりする人が身近にいないのかもしれない。特に単身で来ている若い先生は、家に帰っても一人、友人は職場の同僚という世界の中でメンタルヘルスを維持するのが難しいのではないかと、いろいろなことを考えました。

加えて、土日は漢検、英検に加え水泳大会、部活の指導、ソフトボール大会、バレーボール大会、日本人墓地清掃など、学校職員として日本人会の行事への参加を求められることも多く、休日ですらゆっくり体を休めることもままならないことが多くありました。

そして、そういう生活の中でも教師として自分の指導力を高めていきたいと考えたとしても、学校研修以外の場では研修の機会がほとんどないのではないかと考えました。教育書を手に入れる

ことすら難しく、KL 市内中心部にある紀伊國屋書店で購入すれば国内の1.5倍の値段です。

そこで、財団派遣として4年目を迎えていた東京都出身の先生、21年度に大阪府から派遣された同い年の先生、同じ年度に静岡県から派遣されていた3歳下の先生に「有志で自主学習会を立ち上げたい」ともちかけると「いいよ、やろう!」と賛同してくれ、財団派遣の教職経験の少ない若い先生を中心に「若手(自称も可)学習会」を立ち上げることにしました。大風呂敷を広げると参加しづらくなるし…ということで、学習会の存在を公にはあえてしませんでした。2~3か月に一回、部屋を提供してくれる先生を募り、仕事が終わった後の19時からや、何もない休日の午後から時間を設定するなどし、2~3時間テーマを設けて少人数でディスカッションするという風にしました。言い出しっぺということもあり、基本的には私がメンバーにどんなテーマで学びたいかを聞いてレポートを作成し、それを肴に話し合うことが多かったのですが、先ほど述べた3人の先生方もいつもいろいろとレポートを持ち寄ってくれ、私にとっても非常に学び多き時間となりました。レポートのテーマは内容も領域も多岐にわたる大変興味深いものばかりでした。印象に残っているのは、あるメンバーから「いつも授業でワークシートに気付いたことや感想なんかを書かせるんだけど、どんなふうに赤を入れたらいいのかわからない」という声があり、その先生が実際に授業で子どもに書いてもらったワークシートをもとに、みんなで「自分だったらこんな風に赤を入れる!」と話し合ったことです。いろいろな視点や子どもの見方などを知ることができ、大変貴重な機会となりました。

メンバーは私を含め平成22年度派遣が多かったので、私たちの帰国ともに学習会も解散かなと思っていたのですが、24年度派遣の二人の先生から「自主的に学び合える場がほしい」という声を聞き、「実はね…」と学習会の存在を明かしたところ「ぜひ参加したいです!」ということで、24年度後半は新しいメンバーも加わり、にぎやかな

会になりました。25年度以降も若い先生を誘って継続していきますと言っていただくことができ、うれしい気持ちでマレーシアを去ることができました。

## 7 謝辞 ~おわりにかえて~

この3年間、本当にさまざまな人に出会い、学ぶ機会をもらい、自分自身教師としてかけがえない貴重な経験をさせていただくことができました。自分にかかわってくれたすべての人々に感謝の気持ちでいっぱいですが、やはり最後に感謝しなければいけないのは妻と二人の息子たちだと思っています。

慣れない環境で、言葉や宗教、文化、生活様式、水や食べ物、あらゆる面で日本とはちがうマレーシアという国で、親しい友人や親とも気軽に会うことができず、配偶者のボランティア活動など、家事以外にも様々な責務が課せられ、妻にとっては本当に大変な3年間だったと思います。実際最初の1・2か月は日本に帰りたいと漏らしていたこともありましたが、しかし、他の先生方の奥様方など、すてきな出会いにも恵まれ、2年目や3年目はマレーシアでの生活を楽しいと言ってくれました。最後の数か月はドリアンやローカルフードを家族で食べに行きながら「あと1年くらいでもいいね」と言い合えたのも本当によかったです。

二人の息子に関しては来馬当時それぞれ2歳と7か月でしたが、帰国する時には5歳と3歳、大きなけがや病気もせず(それでも病院には本当によくかかりましたが)過ごしてくれました。住んでいたコンドミニアムの2階に保育園が、そして隣のコンドミニアムの中に同系列の幼稚園が入っていたこともあり、息子たちは3年間そこに通わせましたが、マレーシア人の友達もたくさんでき、先生方にもよくしていただき、それぞれ保育園・幼稚園生活を楽しむことができたようです。長男は日常会話程度であれば英語でのコミュニケーションも随分と上手になりました。幼稚園で

は、マレー語と中国語（マンダリン・華語）も学んでいたようです。帰国した今も Skype のレッスンなどで何とか英会話のスキルを維持できればと考えているところです。

最後の1年は4年1組の担任に加え、初めて学年主任の仕事もさせていただきました。2組は新卒3年目、大学を卒業してすぐに来馬し、クアラルンプールで教員生活をスタートさせた若い女性の先生、3組は24年度派遣、埼玉県出身の同い年の男の先生と、比較的「若い」学年になりました。経験が少ないことを言い訳にせず、だからこそ3人で支え合ってがんばろうと話し、授業づくりはもちろん、連絡帳の返事から電話での話の内容まで、少しでも不安になったり困ったりしたらすぐに3人でシェアしようと話しました。そして、実際にそれを実行して一年間を過ごすことができました。いい意味でもそうでない意味でも、本当にいろいろな先生がいましたが、私は出会いに恵まれた幸せな3年間だったと思っています。

3月の修了式直前、学年お別れ集会を行いました。楽しかった思い出の発表や運動会でおどった YOSAKOI ソーランをもう一度！など、楽しい時間はあっという間に過ぎ、最後に先生方からメッセージ、という機会があったので、子どもたちにこんな話をしました。

「みんなは最初マレーシアに来たとき、どんな気持ちだっただろう。日本で仲が良かった友達や親戚と涙のお別れをして、おうちの人の仕事の都合で半分無理やり連れてこられた人もいたかもしれない。本当の気持ちはマレーシアなんか行きたくない！って。でも、来てみたら友達はみんな優しいし、日本にはない面白いこともいっぱいあるし、勉強も一生懸命がんばっているし。だから今はマレーシアでの生活も悪くないな、楽しいなって、そう思っている人がいるとしたら、それはとっても素晴らしいことだと思います。先生も含めて、今年度で本帰国する人の中には、『日本に帰ってからのことが不安だ、心配だ』と思って

いる人もいるでしょう。他の人も、多くは数年後には日本に帰るだろうし、ずっとマレーシアにいる人も、中学部を卒業したら新しい世界へ羽ばたいていかななくてはならない。そこで先生がみんなに大事にしてほしいのは『植えられたところで芽を出し、自分の花を咲かせられる花になろう』ということです。『ぼくはこんな場所に植えられなかった』なんて言っている、何も始まらないものね。自分が置かれた環境の中で、楽しさを見つけだし、自分の良さを自分で伸ばしていける、みんなにはそんな大人になってほしいと思います。またどこかで会いましょう」

4年生の子どもたちに話しながら、途中からなんだか自分自身に言いきかせている気がしてなりませんでした。

私も今年度から札幌の小学校に戻ってきました。クアラルンプール日本人学校で出会った子どもたちがそれぞれの場所ではがんばっていると信じて、私も植えられた場所で成長し、自分なりのきれいな花を咲かせられるよう、新たな気持ちで努力していきたいと思っています。

ありがとうございました。

